

Cousin Phillis 論

フィリスの自立への過程 — 対立と統一を通して

芦澤久江

I はじめに

エリザベス・ギaskell (Elizabeth Gaskell, 1810-65) はさまざまな作品を描いている。たとえば労働問題を扱った社会小説『北と南』(North and South, 1855)、未婚の母の問題を扱った最初の小説『ルース』(Ruth, 1853)、田園を舞台に繰り広げられる田舎町の人々の日常生活を描いた『克蘭フォード』(Cranford, 1853)、自伝的要素の濃い『妻たちと娘たち』(Wives and Daughters, 1866)、作家の人物像に迫った伝記『シャーロット・ブロンテの生涯』(The Life of Charlotte Brontë, 1857) などがある。

ギaskellの作品のなかで『いとこフィリス』(Cousin Phillis, 1858)¹⁾ はそれほど強烈な印象を与えるものではないかもしれない。フィリス (Phillis) の恋は悲劇といわれているが、主人公の死で幕を閉じるような激しい物語ではないが、どちらかといえば田舎で見られる風景とともにフィリスの成長²⁾ が穏やかに語られる教養小説である。あるいは無垢の少女が失恋を経験し、そこから教訓を得る教訓小説³⁾ としてジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の伝統を引き継いだ作品⁴⁾ とみなすこともできる。特にオースティンの『エマ』(Emma, 1816) と共通しているところがある。主人公のエマは自分のことよりも友人の結婚をとりまとめようとするが、最終的にはそのような行為を反省し、自らの恋を成就させる。このエマの性格は主人公フィリスよりも語り手のポール (Paul) に重なりあう。ポールも彼自身よりもフィリスの恋の手助けをしようとして辛酸をなめる。そこでは大事件は起きないが、若さゆえにこのような過ちを犯してし

もう二人が読者への教訓となっているのである。オースティンのということに関していえば、題材の選択の仕方についても両作家に共通点がある。「田舎の村の三、四軒の家族」を中心にごく身近なことがらを並べたて物語を作り上げるオースティンの執筆方法はまさにギャスケルの手法と同じである。特に『いとこフィリス』に登場するのはたった二軒の家ホールマン家 (The Holmans) とマンニング家 (The Mannings) であり、イギリスの田舎に住む典型的な中流階級の人々の生活が描き出されている。

また山脇百合子氏が述べているように⁵⁾、風景は実に美しく描かれ、絵画的でさえある。デイビッド・セシル (David Cecil, 1902-86) は自然の過酷さがこの作品には描写されていないと批判しながらも、田園の壮大さを表現している点ではトーマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) の『ダーヴァビル家のテス』 (*Tess of the D'Urbervilles*, 1891) に匹敵するものとして高い評価を与えているほどである。⁶⁾ そのような意味で『いとこフィリス』は『クランフォード』に類する田園小説としても読むことができるであろう。

このようにいろいろな要素を含み、フィリスの自立を中心として立体的に物語が構成されている。そこで小論では自然⁷⁾と文明の対立を基にフィリスの独立がどのように描かれているか考察してみたい。

II 対 立

『いとこフィリス』の話の展開は遅く、ゆっくりとしていて⁸⁾、登場人物の性格づけや情緒の動きもゆるやかである。しかし詳しくみていくと、明確に鋭く対立しているものが幾つか重なりあっていることに気づく。まず明らかなのは舞台となった田園とそこに敷設される鉄道である。一方は自然を象徴、もう一方は文明を代表し、マンニング家とホールマン家が配置されているのはその対立を基本的構造としてである。ポールの父は科学の発達によって開発された鉄道の技師であり、ポールもそれを引き継いでいる。つまりポールの父は発明家で、どちらかといえば実践的であり、それに対してホールマン家の当主は古典文学を愛し、牧師という知識階級に属している。またポールの母親の旧姓はマニーペニー (Money Penny) で、まさしく文明の産物を意味しているし、それとは対照的に

フィリスの母親の旧姓はグリーン（Green）でこれもみごとに自然を喚起させる命名である。

さらにフィリスの父親は説教をするだけでなく、農業も行う自然に密着した牧師でポールが知っていた長い退屈な説教だけをする非実践的と思える牧師ではない。またフィリスの母親とフィリスも著しい対照をなしている。ポールの父親がホルマン家で鉄道の話をしていたとき、その話に興味をもっていなかったのはフィリスの母親一人であった。彼女の母親はそのような話よりもポールの父親が燃えさしを使って図を描き食器棚を汚すことの方が気にかかっていたのである。

Cousin Holman had, in the meantime, taken a duster out of a drawer, and, under pretence of being as much interested as her husband in drawing, was secretly trying on an outside mark how easily it would come off, and whether it would leave her dresser as white as before. (p.289)

このように彼女はヴィクトリア朝時代の典型的な家庭内天使なのである。ところがその娘フィリスは知識や教養にあふれ、どんなことにも興味を示す好奇心の強い少女である。そのうえポールが自分自身の無知を恥ずかしく思うほど、さまざまなことさらに精通していた。フィリスの母親が代表的なヴィクトリア朝時代の女性であるとするれば、フィリスはまさに新しい女性として描き出されている。しかしそのフィリスが初めて恋をするホールズワース（Holdsworth）はイタリア語に精通してはいるものの、フィリスのようにヴェーギル（Publius Vergilius Maro, 70-19B.C.）を愛読することはなく、ポールよりも実践的な都会人として設定されている。

すでに述べたように、少女が大人へと成長していく姿を描いたこの作品は教養小説のつねとして子供が親から独立することをテーマとしている。そのことから当然子供と親という対立も生じている。冒頭においてポールがはじめて一人暮らしをする様子は、結末におけるフィリスの自立の伏線となっているのである。

いままで述べてきたような二項対立の問題を表で示すと次のようになる。

田 園 — 鉄 道

ホールマン家	——	マンニング家
ホールマン牧師	——	ピーターズ牧師
フィリス	——	ホールズワース
フィリス	——	フィリスの母親
フィリス	——	フィリスの両親
ポール	——	ポールの両親

これらの対立の図式からさまざまなことが読み取られるであろう。これらが重層的に絡み合うと、複雑な効果をあげ、一つの統合へ向かって融合作用を誘発する。重層的対立を繋ぐ役割を果たすのは何であろうか。そこで次に自然と文明という対立を軸にフィリスの成長の過程に関わる二人の人物ポールとホールズワースについて考察してみよう。

III ポール

ポールはこの作品のなかで語り手⁹⁾として客観的にフィリスを語る役割を担い、登場人物として実際にフィリスの恋の展開に重要な影響を及ぼす登場人物でもある。さらに彼はフィリスの心の奥をのぞいた唯一の人物でもある。つまりフィリスに対してもっとも遠いところに位置していると同時にもっとも近い存在でもある。そのポールの性格づけはどのように行われているであろうか。

この小説の始まりにおいて、ポールの一人暮らしの様子が語られている。初めて親元を離れ下宿することになっているが、まだ父親に付き添われてやってくる心許ない少年の面影がある。ポールが得た地位は父親の助力によるもので、彼自身が自分の努力によって手に入れたものではない。彼は自分から進んで物事を積極的に行う性格ではないことがわかる。しかも下宿先のドーソン (Dawson) 姉妹や長い説教をするピーターズ (Peters) 牧師に不満を抱きながらもそれを表面には表わさない。また両親へ手紙を書くという義務も怠らず従順である。彼ははっきりと意見を主張をせず、感情を露にしないで内へ押し込めてしまう。主張することによって調和の保たれていた関係が壊れてしまうことを極度に恐れているのである。

しかし摩擦を避けようとして両親のいっつけ通りに手紙を書き、その結果彼はフィリスと出会うことになる。手紙はこの場合ポールと両親を結ぶ役目を果たし、鉄道がポールとフィリスの一家を繋ぐ重要な役割となっている。鉄道が敷設されることにより自然は破壊されるが、一方それによってこれまで遠くにあったものが近くになり、距離的に接近不可能であったものが結ばれることになる。鉄道の仕事に携わらなければ、ポールはおそらくフィリスには会えなかったであろう。それゆえ鉄道とポールはこの作品において人々を結びつける媒介となっているのである。

感情をあまり表に出さないポールは語り手としてむしろ中立的であるといえるであろう。ポールの行動が外に向かって爆発しないため、かえって彼の感情は内にこめられ、内面化された力をもって読者に語られることになる。すなわち、ポールの日記の一部を読者がかいま見るとい形式が成立するのである。しかしそこでポールが語るのは彼自身ではなく、フィリスという第三者である。そのため読者はフィリスをより客観的に知ることができるよう工夫されているのである。

ところがポールをより重要な存在に仕上げる仕掛けがもう一つ設けられている。彼は単なる傍観者ではない。作者は彼をフィリスともっとも密接な関係に置くことによって彼を物語の展開に深く関わらせる。前述したように、ポールは鉄道の働きと同じようにさまざまな人々をつなぐ役目をし、同時にフィリスの内奥の秘密を知る唯一の人間として設定されている。『嵐が丘』において語り手のロックウッドがキャサリンの日記を読んで彼女の幽霊を見るのと同じように、ポールもフィリスの苦悩を目撃するのである。

彼がこのようなフィリスの真実を知り得る立場に配置されていることに読者が抵抗を感じないのは、彼らの間に実に巧みに同質性が描き込まれているからだと思われる。二人の性格の共通部分はあまり感情をあらわさず、親の意志にそって行動し、父親を崇拜している点¹⁰である。しかも彼らの両親はまだ彼らを子供としてしかみなしておらず、彼らを必要以上に保護しようとする。たとえばポールは下宿生活を始めたにもかかわらず、相変わらず彼の両親に手紙を書き、下宿先でもドーソン姉妹に監視されている。一方フィリスも年齢に不相応なエプロンを着ているが、彼女の両親にはそれが不自然には感じられない。特に最後の場面で両親がフィリスにとっておそらく大事だろうと思っているものが、実はフィリ

ス自身にとってもはや何の価値もないものになっている。自立し始めたフィリスとその両親の間に基本的な考え方の違いが生じたのである。

さらに彼らの同質性を論ずるうえで重要なこととして彼らの親密さが血縁関係によってつながっているということである。彼らがたぶん心の底で本質的に何か似ていると自然に感じとれるのはそのような性格づけをした作者の工夫によるものであるにちがいない。この同質性からフィリスはポールに心を開き、ポールはフィリスの秘密を知るに至るのである。

しかしながら彼らがまったく同質だったというわけではない。フィリスは彼女の父親の影響により古典文学に興味をもち、知識や教養を兼ね備えていた。ところがポールは鉄道関係の仕事をしており、より実践的、実用的な世界に生きている。最初はフィリスに好意を抱いたポールはすぐにその違いを認識し¹¹⁾、彼女のことを異性の対象として考えることをあきらめる。この段階で彼らは恋人同士の異性関係から解放され、ポールはフィリスのことを「妹」と呼ぶ。そのようにしてポールはフィリスに親密さを抱きながらも客観的に述べるのが可能となる。フィリスもまたポールを異性としてではなく、同じ問題を抱えた友とみなし、二人は自由に心を打ち明けることができる無垢の間柄になるのである。

IV 交 流

二人は基本的に同質であるからこそ秘密を共有でき、また男女という性の関係から解放されているからこそポールはフィリスを冷静に見つめることができた。しかしフィリスは知り合うとすぐに彼に親近感を抱いたわけではない。フィリスの心の動きはどのように発展していくのであろうか、次にその問題を考えてみたい。

ポールが初めてホールマン家を訪れた場面を引用してみよう。

There was a garden between the house and the shady, grassy lane; I afterwards found that this garden was called the court; perhaps because there was a low wall round it, when an iron railing on the top of the wall, and two great gates between pillars crowned with stone balls for a

state entrance to the flagged path leading up to the front door. It was not the habit of the place to go in either by these gates, or by the front door; the gates, indeed, were locked, as I found, though the door stood wide open. (p.265)

ドアは開け放たれているが、門は閉じているこの屋敷はホールマン家の特徴さえ示している。外部の者を寄せつけないほど閉鎖的空間ではないけれども、半ば警戒はしているのである。

フィリスがポールに会ったときの様子はどうかであったであろうか。

She looked me steadily in the face with large, quiet eyes, wondering, but untroubled by the sight of a *stranger*. (Italic は筆者) (p.266)

フィリスにとってポールは当然、'stranger' であるため、予期しないこの訪問者にフィリスは驚いている。一方ポールは初めてフィリスに出会ったとき彼女の美しさに心打たれ、興味を抱き、あまり気の進まないふりをしながらも再びホールマン家を訪れてみたい気持ちに駆られる。

ポールの好奇心はフィリスの美貌だけでなく彼女の父親にも向けられていく。ポールが彼に出会ったのはうす暗い教会のなかではなく、農作業中の畑においてであった。ポールにとってこれはまさに驚きであった。彼の中の牧師のイメージとは異なって、ホールマン牧師は非実用的なお説教をするだけではなく、人々とともに働く真の労働者であったからである。そのうえフィリスと同様に彼女の父親も古典文学、とりわけヴァーヅルをこよなく愛しており、実益的な仕事に従事しているポールにとってフィリスの一家はこれまでになく新鮮に見えたにちがいない。

しかしフィリスの父親は現実社会では実践的でない古い文学を大事にしてはいるものの、新しいものを受け入れようとしない保守主義者ではなく、むしろポールが感心するほど鉄道などにも興味をもっていた。それゆえ異質の世界からやってきた機械文明に携わっているポールにも寛大だったのである。

ポールの訪問がたび重なっていくにつれて、屋敷は次第に開け放たれていく。

All the doors and windows at the farm were open when I arrived there,
and every tiny leaf on the trees was still. (p.307)

農場のドアも窓もこれまでになく全開しており、ポールを見知らぬ者として警戒するどころか、喜んで彼を出迎えようとしている。フィリスも屋敷が開かれていくにつれ、ポールを‘stranger’としてではなく、家族のように受け入れるようになっていき、ポールとフィリスの一家の交流は次第に深まっていったのである。

V ホールズワース

ポールが両親から独立して生計を営むようになったとき、父親に代わって彼の尊敬の対象となったのは職場の上司であるホールズワースであった。彼は鉄道技師という仕事からヨーロッパ各地をまわり、経験豊富な知識人で、十分ポールの尊敬に値する人物であった。このようにポールは彼が尊敬できる人物と交際することに誇りを感じている。これは彼自身がまだ自己の価値を見出していない証拠である。彼にはまだ独立する自信がないのである。

ポールが登場人物として人々をつなぐ役割を果たしていることはすでに述べたが、ホールズワースとフィリスを引き合わせるようになったのもポールのそうした性格づけによってあり、自然な展開とみなされよう。ホールズワースはポールにとってもフィリスの家族にとっても知的な面で大変刺激的であった。彼はヨーロッパかぶれの髭を生やしており、田舎の人々には洗練されたインテリに見えたのだ。フィリスの父親さえも彼の豊かな学識に感心し、彼を賞賛している。おそらくポールがホールマンのような新しい生き方をする牧師に驚かされたように、ホールマン一族はホールズワースのような新時代の先端を生きる青年に憧れを抱いたのであろう。しかし彼らは外見だけに惑わされていたのである。

ホールズワースはヒースブリッジの鉄道敷設の際病気にかかり、フィリスの家で療養することになる。彼が本質的にこの土地にあわないことを彼の病気ははっきりと物語っている。人々を繋ぐ役割として登場するポールに対して、ホールズワースは同じ仕事につきながら、鉄道の仕事が完了するとその土地を去って別の

土地へ移っていく真の意味でのよそ者である。彼は鉄道を敷設する技師であるというよりむしろ、その鉄道に乗って通り過ぎる旅人にすぎないのである。

VI フィリスの自立

フィリスがポールに向かってイタリア語を読めるようになりたいと言ったとき、ポールの頭に浮かんだのが彼の英雄ホールズワースであった。そして不幸をほぼ決定づけたのはホールズワースを賞賛する父親の言葉であった。フィリスはこの時点でまだ父親から独立していない。これまでフィリスにとって父親は絶対的存在であったため、父親の判断は直接フィリスに影響した。それゆえホールズワースに対する彼女の気持ちを父親が肯定し、後押ししてくれたことの意味は絶大であった。ホールズワースは自分が好きになるのに値する人物だという自信をフィリスはもつことができたのである。

ホールズワースがカナダへ行くことをポールに打ち明けるその日、フィリスはホールズワースに自分の心を告白するかのようには花束を渡す。それはフィリスにとって勇氣ある積極的な行為であり、彼女の心の叫びであったであろう。しかし不幸にもホールズワースはすでにカナダへ旅立つ決心をしていた。ホールズワースが去ってから、フィリスはポールの目にはっきりとわかるほど憔悴しきっていくが、彼女の両親にはそれが伝わらない。ここでフィリスは両親にも、ポールにも打ち明けられない恋の悩みを抱え込むのだ。これが彼女の独立の第一歩である。両親にも邪魔されない個人的空間が彼女の屋敷のなかには見当たらない。しかし彼女は心の内のはけ口を求めてついに両親の住む屋敷を離れ彼女が子供の頃に避難所として使っていた隠れ家で泣くことになる。そこはフィリスの心を養った父親さえ知らない彼女だけの内密空間であったのである。

これまで父親に従い、秘密をもたなかったフィリスはついに両親の知らない場所に隠れる。ところが、その孤独な内密空間をポールに見られてしまう。こうしてポールはフィリスの心の内に踏み込んでいった。ポールは彼女を本当に理解していたからこそ彼女の心の空間に入り込むことができたのである。穏やかなフィリスが我慢できずに外部へ感情を爆発させているのを目撃したポールは、ホールズワースが彼に言ったことをフィリスに伝えようと決心する。つまりフィリスの

秘密を知った以上、ポールも彼の秘密を伝えなければならなくなったのである。ポールがフィリスにホールズワースの告白を打ち明けなければ、フィリスの悲劇は起こらなかったと一般的には解釈されているが、それは必ずしも彼の過失の結果とはいえない。

悲劇を引き起こしたものの、ポールがフィリスとホールズワースの恋を取り持とうとしたのは自然であり、ポールがそうしなくてもやはりフィリスに悲劇は起こったであろう。ポール自身が彼の「過失」であることを認めているため、読者はポールが過ちを犯したと考えるよう誘導されているが、ホールズワースがフィリスのことを好きだと言ったのは事実であり、それをフィリスに伝えたとしてもその罪は軽いものにすぎない。もっとも深く罪が問われなければならないのは⑩ホールズワースに対するすべての人々の認識不足である。ホールズワースという人物をポールもフィリスもその父親も見抜けなかったということにこそ悲劇の原因があるのである。

しかしそれと同時にこのことがなければ、フィリスは父親から独立できなかったであろう。彼女にとって父親は絶対過ちを犯すことのない存在であり、神格化さえされていた。父親のいうこと、なすことには間違いがなく、絶対に正しいと信じてきたからこそフィリスは彼の意志にしたがってきたのだ。しかしながらフィリス自身はこの出来事によって父親の見解が必ずしも正しくないことに気き、自分自身の心と存在に目覚めたのである。結局フィリスが病気になり、死の境をさまようことになったのはただ彼女がホールズワースに失恋したことだけが原因なのではない。恋する相手の結婚を知って絶望を感じたのは明らかであるけれども、自己の基盤がくずれ、彼女の存在が危機にさらされたからである。

それはフィリスが頭を抱えて父親の方に倒れかかり気を失ったという行為に象徴的に表現されている。前述したようにフィリスの価値観は直接父親の考えであり、彼によってフィリスの自己は土台が固められていた。しかしフィリスも父親も価値を認めたホールズワースは彼らが思っていたような人物ではなかったということがわかったとき、自己信頼はゆるぎ、父親自身も自信を失ってしまったのだ。何を信じればよいのか、支えを失った彼らは神の消失に近い状態になったにちがいない。フィリスだけでなく、父親も動揺し、はげ口を求めてポールを責める。ポールの責任にすることによって、ホールマン牧師は自己の罪を軽減しよう

とし、自分の観察力の欠如から目をそらそうとしたのである。

フィリスは氣を失って倒れると同時に彼女の自己は完全に崩壊した。それは死の境をさまようほどの苦しみであり、フィリスはそこを通り抜けて新しい自己に生まれ変わらなければならないのである。古い殻を破り、新しい自己に目覚めた彼女はポールの家に滞在したいと希望する。隠れ家で心の内を爆発させたように父親と母親から離れ、客観的に自分を見つめ直すことで彼女はようやく新しい自己を確立しようと決意する。失恋によって自己は崩壊し、彼女の価値観は混乱するが、死の危機を切り抜けた彼女はキリストの復活のように蘇り、再び自己を統一しようとするのである。

VII 統 一

これまで見てきたように、この作品において、フィリスは自己の心の断片をいったん破壊させ、無秩序に散乱した自己を拾い集め、再び統合しようとした。この作品はこうしたフィリスの自立を描いているけれども、それと同時にさまざまなものが調和に向かって収斂されていく。表で示したように『いとこフィリス』には特に自然と文明という対立が物語の核をなしているが、フィリスが異物を受け入れ、新しい自己を確立しようとするように、その背景にあった自然と文明という二律背反するものも融合に向かって進んでいく。フィリスの成長と同時に地盤が緩くて鉄道を敷設するのに困難だった静かな田園ヒースブリッジもついにその文明の遺産を受け入れ、新しい町として生まれ変わる。またフィリスだけでなくポール自身もフィリスの失恋を通して教訓を得、自立の第一歩を踏む。さまざまな価値観が混在するなかで、すべては未来に向かって統合されていくのである。

ギャスケルの対立と統一の描き方は決して激烈なものではない。対立がそれほど激しくないのも、その融合もゆるやかである。しかし穏やかな田園を好むギャスケルでさえも二律背反するものを調和させるとき、彼女なりに激情の爆発を展開させている。たとえばもの静かなフィリスでさえホールズワースが立ち去った後、悲しみのあまりポールの前で顔を涙で濡らし泣き、苦悩のあまり死の淵さえさまよい歩く。これらは対立から調和へ向かうときに必ず伴う融合と浄化の苦しみである。その苦悩が大きければ大きいほど、そこから生み出されるものは価値

をもつ。それゆえギaskellの対立と統一も一見穏やかではあるが、統一までの過程には激しい情熱が繰り広げられている。そして対立したものを結びつけたのがポールと鉄道であった。ポールが媒介としてフィリスの自立を助け、さらに田園に鉄道を敷くことでヒースブリッジも新しい町に変わり、それぞれ二つの対立は調和したのである。

ギaskellは田園に鉄道が敷設されることを肯定もしなければ否定もしていない。しかしこれらを統合したことでギaskellの意図は明らかである。彼女が描いたこの世界は新しいものと古いものが入り乱れ、人々の価値観が揺れ動いていた時代であった。1825年イギリスに初めて鉄道が開通し、1858年この作品が出版されるまでの間に¹³⁾人々の当惑と社会的変化はこれまでになく大きかった。科学の進歩が信仰の弱体化をもたらしヴィクトリア朝時代の精神的不安は人々に一層強く新しい調和の時代の到来を待ち受けさせた。都会は特に速いスピードで変化し、田舎にもそれは深い影響を及ぼした。ギaskellはそのような社会の移り変わりを見守りながら、かつて子供時代に過ごした家に対する懐かしい思いを込めてこの作品を描いた。『いとこフィリス』が変動する社会のなかで平穏で平和な世界に統一されていくのは、ギaskellのこよなく愛した土地ナッツフォード (Nutsford) とサンドルブリッジ (Sandlebridge)¹⁴⁾ に対する郷愁の念が秘められているからである。

Text;

Elizabeth Gaskell, *Cousin Phillis and Other Tales* (Oxford, 1987)

注

- 1) Arthur Pollard は『いとこフィリス』が自叙伝的観点から描かれているため親密な雰囲気をつくりだしていると述べている。Cf. Arthur Pollard, *Mrs. Gaskell: Novelist and Biographer* (Manchester Univ. Press, 1965) p.186.
- 2) Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell* (Faber and Faber, 1993) p.538.
- 3) ギaskellは幼い頃トマス・デイヤトリマー夫人、あるいはバーボルド夫人の教訓小説を愛読していた。
- 4) F. R. Leavis, *The Great Tradition* (Chatto and Windus, 1962) pp.2 and 9.
- 5) 山脇百合子著『ギaskell研究』(北星堂、昭和57年) p.431.

- 6) David Cecil, *Early Victorian Novelists* (Constable and Co. Ltd, 1934) pp.227-8.
- 7) 『いとこフィリス』は自然のサイクルとフィリスの恋愛の結末が融合している。Cf. John McVegan, *Elizabeth Gaskell* (Routledge and Kegan Paul, 1970) pp.44-5.
- 8) *Ibid.* p.538.
- 9) ギャスケルはさまざまな語りを想定していると Lansbury は述べている。Cf. Coral Lansbury, *The Novel of Social Crisis* (Paul Elek, 1975) p.209.
- 10) フィリスもポールもそれぞれ父親を尊敬しているのは明らかにギャスケルの父親に対する思慕からきていると思われる。Cf. Yvonne Ffrench, *Mrs. Gaskell* (Home and Van Thal Ltd., 1949) p.94.
- 11) 両親に従っていたポールは父親から結婚相手としてフィリスを勧められたとき、はっきりと拒否している。この強い拒絶はポールの独立を表しており、フィリスの自立と呼応している。
- 12) Ffrench はポールに過失があるのではなく、両親にあると述べている。 *Op. cit.*, p.96.
- 13) 鉄道敷設から『いとこフィリス』出版まで約30年経っているのでこの作品は緊急の社会問題を扱っているわけではない。 *Ibid.*, p.3.
- 14) 作品中の風景はナッツフォードであり、ホープ・ファームはサンドルブリッジだといわれている。